

第一日曜日  
教会学校 9:00～  
主日第一礼拝 9:00～  
主日第二礼拝 10:30～

その他の日曜日  
教会学校 9:00～  
聖書を読む会 9:00～  
主日礼拝 10:30～

# 日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2017 (平成29年) 12. 10

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276  
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

聖書と祈り会  
毎週水曜日 10:30～  
成人会  
第3日曜日 礼拝後  
婦人会  
第4日曜日 礼拝後  
教会附属 南部坂幼稚園

## 「神の愛 — クリスマスに —」

牧師 松谷 祐二

### ヨハネによる福音書 第三章一六節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

### ローマの信徒への手紙 第八章三一―三九節

では、これらのことについて何と言ったらいだらうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずが、ありますでしょうか。だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょうか。人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

(新共同訳聖書)

クリスマスに、わたしたちは何をもちょうも心に留めるべきでしょうか。クリスマスは、言うまでもなく、イエス・キリストの誕生を記念した祝い

の日です(あくまで記念日であって、文字どおりのイエス様の「誕生日」が十二月二十五日かどうかは分かりません)。日本の教会では「誕生」よりも、イエス様は天の住まいを離れてこの地上に降(くだ)りてこられた神の御子だという意味を込めて、「降誕」という言葉を使うことが多いかと思えます。

また、キリスト教会ではよく「神様がイエス様をわたしたちにくださった」という言い方もします。普通に男の子が生まれたのではなく、神様がイエス様を、言わばプレゼントとして、贈(たま)ったのだと。

では、「くださった」という言葉を、わたしたちはどういうイメージでとらえているのでしょうか。教会や幼稚園と関わりのある環境で育った人の場合には、幼いころに絵本や劇を通して受け取ったイメージが大きいのではないかと思えます。馬小屋で生まれ、ヨセフとマリアに見守られながら飼(か)い葉桶(かき)に眠る赤ちゃんのイエス様。天使の知らせを聞いて、探し当てた羊飼(か)いたち。はるか東方から、星の導きでイエス様を拝みに来た博士たち。こうした情景それ自身が、美しいもの、心温まるもの、何か希望に満ちたものとして感じられます。——こんなふうにして、神様の聖なる御子が生まれ、というの、なるほどずてきなお話だ。心温まる、何か心洗(すす)われるような気持ちがありました。ありがと。こういう感情から、おのずと「神様がイエス様をわたしたちにくださった」という表現が出てくるのでしょうか。

感謝の気持ちで受け取れるとすれば、それはそれで良いことに違いありません。しかし、「くださった」＝「神の子イエス様が生まれた」、それだけで終わってしまうと、クリスマスに心に留めるべきことを、まだ十分には尽くしていないように思えます。

聖書そのものは、イエス様の「誕生」だけで、他の何も知らなくとも結構です。「聖なる神の御子が生まれた」と聞くだけで、ね、皆さんうれいでしょう、心が温まるでしょう…、というメッセージを発信しているように見えません。それはまだストーリーの序章であって、どの福音書も、

「神の子」と言うけれども、どんな神の子なのか、何をしてくれた方なのか、という内容を語るために、はるかに多くの言葉を費やしています。

ヨハネによる福音書は、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」——やはり、「お与えになった」と書きます。けれども、この福音書には、クリスマス劇の素材になる、あの馬小屋での誕生の話はまったくありません。

ローマの信徒への手紙は、神は「御子(イエス様)と一緒にすべてのものをわたしたちに賜(たま)り、御子をお与えくださるだけではなく、すべてのものをお与えくださいます」という言い方をしています。なぜなら、神は「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方」だからです、と。

「惜(こ)まず死に渡された」。そうです、「くださった」、「お与えになった」というのは、たんに「この世界に赤ちゃんとして生まれさせてくださった」というだけの意味ではないのです。神が御子イエス様をこの世界に生まれさせたのは、御子がわたしたち人間から結局は拒(き)まれ、十字架の死をとげることまでを承知(しょうち)で、そう決意(けつぎ)されたことだったのです。わたしたち人間のすべての罪を赦(ゆる)し、「罪あり」ではなく「義(よ)なり」と宣言し、滅(め)ぼすのではなく救(すく)う、そのためには、神が人となつて命をささげる、そのことによって、人間の罪の罰(ばつ)をすべて、神の側(かた)で肩代(かた)わりする。それしかない、いや何としてもそうしたい、とお考えになりました。父なる神と、御子イエスとが一致して、そう決意(けつぎ)されました。ただただ、わたしたちを愛されたからです。「神様がイエス様をわたしたちにくださった」という言葉が本当に意味しているのは、そういうことなのです。

「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離(はな)すことができましょう。」「死も、命も、天使も、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離(はな)すことはできないのです。」  
アーメン、クリスマスおめでとうございませう！

## 按手に至るまで

加藤 直樹

十一月二十三日（木）の奥羽教区臨時総会において按手を受けることができました。麻布南部坂教会の皆様にもお祈りをいただき、本当にありがとうございます。

この度、原稿の依頼を受け、何を書かせていたどうかなどと色々と考えてみました。宍戸さんからは「正教師になるまでのご苦労を」とのお勧めもいただきましたが、今はまだ終わってホッとしている感じで、まとまったことを書ける気持ちにまでなっていないです。一つだけお伝えできることは、もう試験のための勉強をしなくてもいいんだという安堵感、この実感だけは深く味わっているということです。さて今回は、私が北上教会に招聘されて三年間の礼拝や祈禱会の様子をご報告させていただこうと思います。

### 〈礼拝〉

北上教会の礼拝出席者は平均して十七名ほどです。十名ちよつとになってしまいうことも稀にあります、そのような時こそ燃えます。

二〇一五年から二年間は、マルコによる福音書を連続講解で読み続けてきました。各祝節などでは別の聖書箇所を選ぶこともありましたが、基本的にはマルコを初めから終わりまで読みました。「神の子イエス・キリストの福音の初め」（一章一節）。北上教会も伝道師もこの福音に聞いていていこうと、事前に役員会へと提案をし、決まってきました。東日本大震災、病気で倒れる牧師、四十三年ぶりの牧師招聘と疲労が感じられる北上教会と、教会に仕える重責、未体験の雪国で生きていけるのかという不安に怯えた伝道師が、キリストの福音に支えられながら新しいスタートをきっていく

ことができた二〇一五年でした。

二〇一七年度は、聖書日課で定められた聖書箇所を用いた、教会暦に沿った礼拝を捧げています。正直な気持ちを申し上げますと、やっぱり連続講解にしておけばよかったと感じる時があります。教会暦に沿わなければ、というある種の強迫観念のような迷いに振り回されつつ説教の準備をしてしまうことが少なくありませんでした。そして終わってみれば、聖書の言葉に沈着した説教になっていないことに気づかされることも間々ありました。夏を過ぎるあたりから少しずつ準備の手応えを感じることもあります。けれども、この一年は特に反省の多い一年になりそうです。

### 〈祈禱会〉

北上教会では水曜日十三時三十分と木曜日十九時三十分の、週二回の祈禱会が続けられています。水曜日には六名、木曜日には二名の出席者があります。

二〇一五年度は、礼拝で用いていたマルコによる福音書を祈禱会でも読み続けました。また月に一度ほど、主の祈りを学ぶ祈禱会をもつ



こともありました。その間、教員から旧約を読みたいという要望が出てきたため、二〇一六年度に入ってからエレミヤ書の聖書研究を始めました。この聖書研究が後々正教師試験におい

て非常に役立つことになり、教会員の方々には感謝、感謝でした。現在は、日本基督教団信仰告白の学びをしています。

最後に、按手に至るまでの約三年、気づけばあつという間に過ぎていきました。これからも北上での教会形成、福音伝道に仕えていきたいと思えます。主の祝福があるように、どうぞ麻布南部坂教会の皆様もお祈りください。北上教会も皆様の歩みの上に主の祝福が豊かであることをお祈りいたします。

## 報 告

\*十一月五日（日）聖徒の日礼拝をささげました。礼拝後は、昨年度、天に召された齋藤寛子姉、鈴木玲子姉を覚えながら、愛餐会をいたしました。

\*北上教会の加藤直樹伝道師が、正教師試験に合格されました。按手礼式は十一月二十三日（木）、奥羽キリスト教センターで行われる奥羽教区臨時総会において、北上教会の牧師就任式は十一月二十六日（日）、北上教会礼拝堂で行われました。

\*十一月二十六日（日）は、日本基督教団の「謝恩日」でした。当日の席上献金は教団年金局へ送りました。

## 成人会

日 時 十一月十九日 主日礼拝後  
午後一時半～三時半

場 所 会堂会議室

出席者 八名

開会祈禱 高橋優美子姉

内 容

エレミヤ書三十六～三十九章を輪読  
「エレミヤの受難」と「エルサレム陥落」

「捕囚」他の話の後に皆で歓談、その後松谷先生に解説してもらったことでエレミヤ書の理解が深まった。

次回は十二月十七日、四十～四十五章担当・木村信太郎兄黙禱を持って閉会

## 婦人会

日 時 十一月二十六日 主日礼拝後

場 所 教会堂会議室

出席者 九名

開会祈禱 菊池才知子姉

閉会祈禱 黙禱

内 容

一、聖書研究「ヨシヤ記」一章

モーセは自分の死後イスラエルの指導者として、モーセの従者ヌンの子ヨシヤを任命する（申命記三十一・一～八）。ヨシヤに神の言葉が与えられた。モーセに代わって、イスラエルの民を率いてヨルダン川を渡り、大河ユーフラテスから地中海にいたる約束の地に赴くように、と。先祖たちに与えられた誓った土地を民に継がせるために、行く手に立ちはだかる者に対して、弱気になったり、譲歩したりせず、神がモーセに命じた律法をすべて忠実に守り、ブレてはならない、その限りどこに行っても成功する。神はヨシヤがどこに行っても共にいる。神は再三にわたって、「強く、雄々しくあれ」とヨシヤを激励している。ヨシヤは、既にヨルダン川の東岸に土地を得ているルベン人、ガド人、マナセの半部族（民数記三十二章）にもモーセが命じた言葉を思い起こさせた。彼らはヨシヤの命に従った。

次回「ヨシヤ記」二、三、四章を学ぶこととする。

二、長らく礼拝に出席できない姉妹たちにクリスマスカード発送の打合せ。  
三、クリスマス祝会の打合せ